

動物ジャーナリストとしての存在、サンディ・ロビンスさん

今回、インタビューさせていただいた動物ジャーナリストのサンディ・ロビンスさんは、ペットについてのスポークスパーソン（提案者）としてのテレビ出演は数知れず、「犬猫のことならサンディに聞け」とばかりに雑誌や新聞、など様々なメディアで活躍される方です。

Excellence in Journalism and Outstanding Contribution to the Pet Industry Award も受賞、その他数々の賞を受賞されています。

サンディさんと私の接点はというと、アルゴンキンホテルのマチルダちゃんを取材したことにより、ご紹介して頂き、そんなすごい方も知らず、気さくでオープンで素敵な彼女と猫友達としておつきあいをさせて頂いています。

サンディさんが猫好きになったきっかけは、彼女がまだ8歳の頃 知り合いの農場に遊びに行った時のことでした。

猫が増えすぎて困っていた農場主は子猫を溺れさせてしまおうと言っていました。それを聞いてパニックに陥った彼女は父親に必死に懇願しました。そして危うく命を奪われてしまうところだったこの子猫2頭 オレンジ色のしま猫「マーマレード」とさび猫「ベベ」が彼女のその後の人生に大きな影響を与えることになったのです。

子供の頃の夢

サンディさんは子供から学生時代をアフリカで育ちました。獣医師になりたいという夢はあったものの、獣医師になる専門の大学が彼女にとっては母国語ではないアフリカ原語のみで行われていたため断念し、ジャーナリズムの勉強を始めました。

筆を取ることによって動物との関わりかたをきちんと知ってもらうこと、それが 結局は動物たちにとっての「最大の薬」になるということに気づいたのだそうです。

猫に関する専門書とは

彼女の数ある著作の中でも集大成とも言える本は、2014 年に出版された「Cat Bible」です。私は、この本を手にとったとき、その内容の深さに圧倒されました。

こんな猫に関する詳しい本が今まであったでしょうか？

各世界の文化に登場する猫の今昔紹介（古代エジプトから最新 SNS サイトまで）や、人と猫が関わってきた歴史について、そして猫という種が現在に至るまでの道のりが詳しく解説されています。現代に実在する猫の種類、野良猫のレスキュー現場や自分にあった猫とのマッチング方法（選び方）、猫の迎え方（赤ちゃん、他の先住動物への紹介方法）、猫に危険な食べ物や植物の紹介です。

猫の体の仕組みから習性や飼い方、食事の選択、関わり方、様々な猫の病気の予防や治療方法、問題行動の対処方法、年齢、ライフステージにあった付き合い方、そして終末期の迎え方まで紹介されています。旅行などの特別な環境における具体的な対処法、ペットシッターの見つけ方や災害にあった時に知っておくべきこと、迷子猫の探し方などとても重要なことが書かれています。更に、獣医師になることや動物シェルターで働くことまで触れています。

29章立て、542ページがなんとカラー写真入りで紹介されています。通常の猫本の20冊分くらいの内容に相当しそうな容量です。一方的な「飼い主はこうあるべき」と断定した指導本ではなく、科学的に色々な角度から問題点や考察点を示す内容で、ゆったりとした気持ちで読み進めるこ

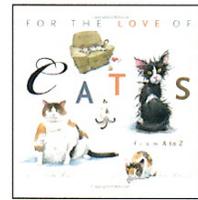
とができます。かわいい猫の写真も満載なので眺めているだけでも楽しめます。

New York  
MGM YORK

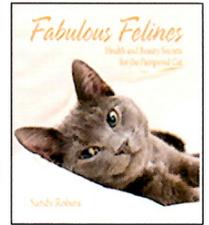
ニューヨーク犬猫事情



右サンディ・ロビンスさん



サンディさんの著書



The Definitive Source for All things Cat (猫の全てを知る決定版) という謳い文句に偽りなしというか、それ以上です。この本一つあれば、もう猫博士間違いないです。

「猫に関わる全ての人々が、たくさんの知識を持って猫に接したら、きっと猫ももっと幸せになる」というサンディさんの愛情がぎゅーりと詰まっています。この本は構想に18ヵ月、まとめるのに6ヵ月、2年もの月日かけたそうです。

確かにこの本を読んだ人は猫にとって、とても素敵な飼い主になる。この本を手にしたティーンエイジャーが、獣医師や動物シェルターでの仕事に興味を持ってくれたら、結果的に、この本によって一体何頭の犬猫が幸せになるでしょう？果てしなく広がる筆の力であると感じました。

人と動物、双方が幸せになるには一人でも多くの人間により深い知識を持ってもらうこと、「違う形での薬」メディアを最大限に使うジャーナリストとしてのサンディさんの情熱を感じました。

日本との繋がり

サンディさんは、日本との繋がりがあります。米国トヨタ自動車の「ペットを同乗させて安全運転を推奨する企画」に数年間に渡り、ペット・セーフティ・アドバイザーとして関わってきたのです。犬が同乗して注意が削がれてしまったために起きてしまう事故は、飼い主と犬だけでなく、他の自動車や歩行者をも巻き込む大惨事になりかねません。「子供もきちんとシートベルトをするようになったのだから、動物にも必要でしょ？」と

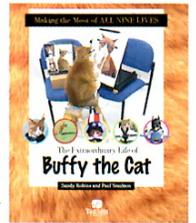
スポークス・パーソンとして各メディアやニュース、車のイベントなどでも犬種によつて異なる安全な車の同乗の仕方を指導してきました。

「以前に日本訪問の際、東京、京都と観光都市を回って大好きになったけど、当時は猫カフェもなかったし猫の島のことも知らなかったから、今度はそういった場所も回ってみたいわ」とサンディさん。一体どんな記事になるのでしょうか。その時は是非私も同行させていただきたいものです。

興味があるジャンルのことは、不思議と英語も脳に入ってくる。洋書もネットで手に入る時代ですので、是非一冊トライしてみたいかがでしょうか？

(レポート by mimi)

取材協力 Sandy Robins  
http://sandyrobinsonline.com/



サンディさんの著書

